

第10章

事後検証 (2) ビデオ記録の共同検証

1. ビデオ記録を使った実践の検証

前章にて学生との4ヶ月間のワークショップを振り返るなかで、重層的に体験理解が進むことで新たな他者理解と自己理解が生まれ、筆者の観察者視点が変容していく過程が浮き彫りになった。本章ではそうした長期的な観察者視点の変容とは別に、一回のワークショップにおける体験理解に対して、事後に第三者とビデオ記録の共同視聴を行ない、筆者の感受認識と第三者の感受認識の比較考察を行なった。関与する中で視点の変化とエピソード記述の考察（メタ観察）による視点のさらなる変化、それに加えて本章での事後の第三者との共同検証によって観察者視点が変化していくことはいかなる体験理解を生み出すのかを考察する。

ビデオを使った実践の研究は通常の観察と筆記記録に比べて、より現実に近い形で実践者の暗黙知を可視化し、多様な観点からの声を引き出すことができる有効な手法とされる（野口, 2007）。とりわけトービン (Tobin, 1989) によるビデオカメラの記録を使った多声的ビジュアル・エスノグラフィー研究以後、ビデオ記録を用いた実践研究が広く取り込まれるようになり、保育や表現活動における子どもの体験理解に資する研究手法としても活用されている。

ビデオ記録を基にした共同での振り返りは、同一の映像を見ても受け手によって反応が全く異なる場合もあり、多様な視点による対話行為が重要になる（野口, p. 314）。刑部 (2012) によれば、具体的場面を共有しやすく話題

を焦点化しやすいという利点がある一方、実施する時間の確保、対等な話し合いを可能にする議論の仕方、様々な人たちがいる場でエピソードの解釈の根拠として実践の映像が見せられることの耐え難さや、一旦解釈の枠組みが出来てしまうと別の見方をするのが難しくなるという問題があるとし、分析ツールの開発利用に取り組みながら、こうした問題を越えて多声的な対話のプロセスの活性化を進めていく必要性を説いている。

本研究では研究協力者とビデオ記録の視聴を基に自由な発言や解釈による体験理解の可能性を探るという主旨のもとで検証作業を進めた。実践の間主観的に感じた筆者の「感じ」に対し、実践には関与していない第三者には同じ場面の出来事がビデオ記録を通してどのように感受認識されるのか。その相違を考察し、実践者・観察者の視点を考察する。

2. 事例研究の概要

(1) 研究目的

研究協力者（以下：協力者）とのビデオ記録視聴から、同じ現象がどのような異なる視点で捉えられるかなど、観察者視点について考察を行うとともに、こうした検証作業の持つ意義を明らかにする。

(2) 研究方法

絵画表現ワークショップ「講座1：のびのび描くドローイング—心が色に溶け出す日—」のビデオ記録を協力者と共に視聴し、討議検討を行なう。

○実施日：2013年X月X日

○場所：九州大学

○協力者：5名

協力者はワークショップには参加していない。研究遂行上のプライバシーや守秘義務等の倫理規定を踏まえた上で、第三者の視点で視聴してもらった。協力者名はアルファベット表記としている。

○実施状況：

協力者と筆者が会場となった研究室に集まり、ワークショップのビデオ記

録 (1 時間 25 分 58 秒) を一緒に視聴した。視聴中に気になったことはその都度話してもらい、筆者がそれを筆記した。視聴終了後に 1 時間程度、各自の感想やコメントを出してもらった。映像を見て感じたこととその理由、協力者同士や筆者との間で視点が異なる点などについて検討した。

3. 分析データ

ビデオ記録視聴と討議において、発話とコメントのデータ (表 10-1)、討議検討のデータ (表 10-2) が得られた。これらを比較分析 (表 10-3) し、

表 10-1 ビデオ記録視聴中の発話とコメント

研究協力者や筆者のコメント	研究協力者のコメントに対して筆者が感じたこと	発話とコメントの意図
09:00 (D) 学生が話す、自己紹介すると、しーん、となって聴くのはなぜか? 笠原が話しているときはそうではなかった。	(笠) 最初の挨拶で親に話している意識があった。しかし学生は子どもに話している意識であり、それを子どもたちがキャッチしているのかもしれない。	・子どもの様子の新たな発見 ・私の場合と学生の場合の違い
12:00 (D) 子どもがジャンケン列車に入ってほしいという子が…子どもが「入って来ないで!」と言ったか、母が「入りたくない」と言ったか?	(笠) 子どもと学生の関係で動き出している雰囲気だったのだろう。	子どもの様子の新たな発見 (疑問)
25:00 (D) 「海になってきたね! (カオル)」に、海 (の絵) にさせようという意識が何気ない言葉に見える。	—	ファシリテーターの意識 (絵を描かせよう)
26:58 (D) 「なんかおるよ! (カオル)」「お友だちが欲しいといっとるよ、(魚を) 増やしてあげて!」にも、海の絵にさせようという意識が感じられる。	—	ファシリテーターの意識 (絵を描かせよう)
28:24 (笠) ノブヨシがミナエ (妹) に筆を渡している	—	子どもの様子の新たな発見 (捉え直し)
29:52 (D) 「すごーい! 何それすてき! (ミナエ母)」, 赤い服の年少さん (ミナエ) が俄然イキイキしている。	—	子どもの様子の新たな発見 (イキイキ)
30:50 (D) 「血が付いた、血が付いた、怖〜い!」	—	子どもの様子の新たな発見 (イキイキ)
34:50 カオルからの提案でダンボールを分割	—	—
35:30 (笠) 「自分の海に行ったら、じっとしとかんといけんよ (カオル)」	(笠) 自分のところだけで描いてほしいという意識が強くなった言葉だなあ…今回初めて気に留めたが、(D) がカオルの海にしようとする意識を感じるという感想が私にも影響を与えた。	ファシリテーターの意識 (各自の範囲内で)